

山美しく人美しい

過疎の町では、何と云ってもまず役場。役場に向かって彼は叫ぶ。「数日前の町民不在の町議会決定は絶対許せない」。立候補の大義を説くこと二十分。良識に訴える第一声である。窓は固く閉ざされたまま。

郡下全町村大合併をめざす案を新町議選告示四日前に駆け込み議決。この暴挙に怒って彼は即日立候補、五日間の選挙戦に突入。告示の日はもう選挙は終わっていると云われる中を、町民の良識に賭けて、法定無料のはがき八百枚と演説で訴え続ける。

「ついに立つか」——識者長年の待望ではあるが、準備なしでムラ型選挙に挑む若者の姿に、暴挙・壮挙それぞれの思いで見守っていた。

辻立ち八十余力所。師走の空の下人影無し。それでも役場前と同じく三十分の訴えを私たちは続けた。私たち（？）孤立無援の彼を私は応援、若者と老骨奇妙なコンビ。演説は彼の人物論で締めくくって歩いた。

「彼こそ町を救う最後の切り札。その証拠を一つ。近隣町村がインチキゴルフ場開

発業者にひっかかって今苦勞の最中、その毒牙が最初わが町に向けられたが、彼はひと声で蹴散らした」「この情熱と無私無欲、これこそ無上の財宝」。危うくへーゲルいわくが出そうになった。

大空に向かい祖母山に対するがごとき叫びはたしかにむなしい。しかし、やがて知る。見よ。軒下にぼつんと人影、手を振って。あぜにも女性がじっと見続けている。単なる票ではない。ひとだ、まぎれもない主体者だ。良識だ。

ある詩人に「山美しく 人貧し」。私は違う。「緒方の里美しく 里人の心さらに美し」。そして、たしかに、美しい小さな結実を皆は見た。

(一九九六年一月十六日)